

東北大学大学院情報科学研究科
言語変化・変異研究ユニット主催

講演会のご案内

テーマ

『色を表す語彙の創発・変化・変異：
認知言語学と実験心理学の視点から』

日時：2018年3月2日（金）14時～17時15分
場所：情報科学研究科棟 2階中講義室

講師1：14時～15時30分

新谷 真由先生（東京電機大学専任講師）

「＜悲観＞はなぜ青いのか—歴史と文化と
身体性から読み解く英語の blue—」

講師2：15時45分～17時15分

栗木 一郎先生（東北大学情報科学研究科准教授）

「日本語の色カテゴリーと
乳幼児の色カテゴリーに関する研究」

発表要旨は裏面をご覧ください。

多数の方のご来聴を歓迎いたします（申し込み・参加費不要）

本講演会は、東北大学運営費交付金、東北大学大学院情報科学研究科講演会・シンポジウム開催支援経費、科学研究費・基盤研究（C）課題番号16K02753（形態部門と統語部門にまたがる文法化と構文化についての統語論的研究）による補助を受けています。

問い合わせ先：小川芳樹（ogawa@ling.human.is.tohoku.ac.jp）

言語変化・変異研究ユニット URL:

<http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/change/home.html>

＜悲観＞はなぜ青いのか—歴史と文化と身体性から読み解く英語の blue—

新谷真由
東京電機大学専任講師

英語で青い色を表す色彩語の blue は、a blue day や feel blue のようにしばしば悲観的な心理状態を表すのに用いられる。その一方で、blue の直接の借入元であるフランス語において、伝統的に青を表す色彩語にこのような意味は見当たらない。このため、blue が持つ＜悲観＞の意味は中英語期に blue が借入されて以来、英語という言語体系の中で創発し独自に発展してきたものと考えることができる。本発表では色彩語の blue が＜悲観＞と結びつくようになった理由を普遍的な身体性と、文化的環境としてヨーロッパを背景にした青の象徴性の歴史的推移を手がかりに探っていく。また、これとともに get the blues などに見られる the blues という、英語に特有の表現の歴史的な成立過程についても見ていく。本発表では英語の blue を中心に扱うが、必要に応じ、フランス語で＜悲観＞を表す色彩語の noir (黒)とその反対語である blanc (白)についてもとりあげる予定である。また、現代フランス語において、英語から借入した le blues がしばしば、悲観の意味で用いられる現象が起きている。フランス語からしてみれば、一度「輸出」した blue が長い年月をかけて「加工」され「逆輸入」の形で戻ってきたことになる。現代フランス語における le blues の振る舞い方についても可能な限り議論する予定である。

日本語の色カテゴリーと乳幼児の色カテゴリーに関する研究

栗木一郎
東北大学大学院情報科学研究科准教授

色カテゴリーとは複数の色を 1 グループとして扱う概念である。この色カテゴリーについて、2つの手法で研究を行った。まず、色票 330 枚を用い日本語話者による色名呼称実験を行った。解析では、色票群の組み合わせにのみ注目し k-平均法というクラスター解析の手法を用いた。その結果、57 名の実験参加者に共通する色カテゴリー (≠色名) 数は 19 で、11 の基本色以外に“肌色”、“水色”を含む 8 つの色カテゴリーが導出された。30 年前の日本語の色名研究と比較して、“水色”が青から有意に分離した傾向を確認した。また、言語獲得前の乳幼児 (5-7 ヶ月) において青と緑の色カテゴリーの境界で脳活動計測の研究を行った。同じ色差のペアを緑から 2 色または青と緑から 1 色ずつ選び、2 色を 1Hz で交代して画面上に呈示し脳活動を比較した。結果、同一カテゴリーの 2 色ペアとカテゴリーの違う 2 色ペアに対する応答に有意な差が見られたが、脳半球間の差は見られなかった。乳幼児のカテゴリー境界は行動実験 (馴化法) でも確認した。この結果は、言語獲得前から色のカテゴリー化が脳内で開始している事を示している。日本語には緑色の物を青と呼ぶ古語の習慣が残るが、和歌の中での色名を調べると 12 世紀末には青と緑が区別され始めたと思われる、英語でも 13 世紀になって青と緑が分離している。つまりカテゴリーが“分離”したのではなく、脳内で自然と形成されたカテゴリーに色名が従ったと考えられる。